

<p>教育学・心理学</p>	<p>【代表的な研究テーマ】</p> <p>□ 睡眠教育研修モデルカリキュラムの開発</p> <p>□ 若手教員の体育授業に対するコミットメントの形成に関する研究</p>
<p>key word</p>	<p>課題解決に役立つシーズの説明</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 教師教育</li> <li>■ カリキュラム開発</li> <li>■ 教材開発</li> <li>■ 教員研修</li> <li>■ メンタリング</li> </ul>	<p>下記の2つの研究は学校現場の体育・健康教育実践の改善と人材育成(教員研修)に役立つ。</p> <p><b>【1】幼・小・中学校における睡眠教育研修モデルカリキュラムの開発</b></p> <p>幼・小・中学校を対象とした睡眠の教育に関わる研修モデルカリキュラムを開発・実践し、その効果を検討した。①高島モデル: 保育園および幼稚園の園児と保護者に、「毎日同じ時刻に起床すること」「朝起きたら太陽の光を浴びること」の重要性を伝える教具として、着ぐるみ(おはよちゃん)と紙芝居(あさひをあびてスイッチオン)を作成し、保育に活用した。②大津モデル: 睡眠の科学的知見の研修と睡眠教育プログラム・教材開発(活用)の研修をもとに、小学校体育科(保健領域)および中学校保健体育科(保健分野)で睡眠の授業を実施し、成果が得られた。また、2年間の取り組みによって、保幼・小・中学校における睡眠教育に関わる研修プログラムが整備された。</p>
	
<p><b>辻 延浩</b> Nobuhiro Tsuji</p>	<p>写真. 幼稚園・小学校における睡眠教育実践の様子          &lt;平成 22・23 年度独立行政法人教員研修センター委嘱研究報告書, 代表: 滋賀大学 辻延浩(2011, 2012)&gt;</p>
<p>教育学部 教授</p>	<p><b>【2】若手教員の体育授業に対するコミットメントの形成に関する研究</b></p>
<p><b>【プロフィール】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●専門分野</li> <li>・教師教育, 保健体育科教育</li> <li>●略歴</li> <li>・1992/04-2004/03 兵庫教育大学学校教育学部 附属小学校 教諭</li> <li>・2010/04-継続中 滋賀大学教育学部 教授</li> <li>・2020/10-継続中 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所 教授</li> <li>・2019/04-2022/03 滋賀大学教育学部 附属中学校 校長</li> <li>・2022/04-継続中 滋賀大学教育学部 附属特別支援学校 校長</li> </ul> <p><b>【主な社会的活動】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●所属学会</li> <li>・日本教師教育学会</li> <li>・日本教科教育学会</li> <li>・日本睡眠学会</li> <li>・日本体育・スポーツ・健康学会</li> <li>・日本発育発達学会</li> <li>●委員</li> <li>・初任者研修「拠点校指導教員」連絡協議会 講師</li> <li>・滋賀県総合教育センタープロジェクト研究 トータルアドバイザー</li> <li>・大津市中学校部活動地域移行検討懇話会 委員</li> </ul>	<p>若手教員の体育授業に対するコミットメントを形成するために、教職2年目および3年目の同一若手教員(A教諭)の小学校体育科の授業実践を対象に、アクション・リサーチの手法を用いて体育授業力量の形成過程を分析・考察した。得られた結果の概要は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 教職2年目のA教諭は学習規律の整った授業を理想とし、学習に従事していない児童に対して意識が向くために、大学院で学んだ体育授業の知識を十分に活用できないことに焦りつつまづきを感じていた。また、助言などを即座に行うことの難しさを強く感じていた。</li> <li>(2) アクション・プランを実行した結果、A教諭はグループ学習やめあての提示の仕方を考えた授業が開けるようになり、児童はめあてを意識し、技能の伸びと仲間との協力を自覚するようになった。さらに、授業場面の期間記録の分析において、2回目の授業では「マネジメント」の割合が低下し、「運動学習時間」の割合の向上することが認められた。</li> <li>(3) 若手教員(2年目)が体育授業に対するコミットメントを形成し、授業指導力を高めるためには、メンターの存在が必要不可欠であることが明らかになった。本研究では、A教諭が信頼を寄せる熟達した同僚の先輩教師であるM教諭からの非指示的な援助が有効に機能したと考えられた。</li> <li>(4) 教職3年目A教諭に対してアクション・プランを実行した結果、A教諭は具体的な情報を交えた声かけや児童との対話を生み出す声かけができるようになった。その結果、A教諭から役に立つ声かけをもらったと感じる児童の割合が高くなった。また、体育授業診断的・総括的評価の項目「友人・先生の励まし」において有意な向上が認められた。</li> <li>(5) 授業後のカンファレンスにおいて、単元序盤では自らの授業観を話すことが多かったが、Y講師の働きかけにより、単元中盤から終盤では児童の技能成果や自らの児童への声かけの内容の是非に関することへの省察がみられるようになった。加えて、A教諭は単元中盤からY講師の助言を受け止めた後、次時の授業の展開について自ら省察し意思決定をした上で授業に臨むようになった。</li> <li>(6) 継続したアクション・リサーチ型プログラムにより、授業者と研究者の間で信頼関係が築かれるとともに、授業者の成長過程に即したカンファレンスの有効性が確かめられた。</li> </ol> <p>&lt;滋賀大学教育学部紀要70・71号, 2021・2022年&gt;</p> <p><b>企業・自治体へのメッセージ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体育・スポーツ教育ならびに健康教育に関する共同開発・共同研究を希望します。</li> <li>・学校現場や自治体と協働して、人材育成(教員研修)の取組を行っております。</li> </ul>